

近所づきあいが避難生活をささえてくれました（その3）

宮城県・看護師さんの話（その3）

【みんなでいっしょに、不安な気持ちをのりこえて】

電気はこない、情報もない、まっくらな夜は不安の気持ちを大きくします。

津波の被害が少なかった家（1階はだめでも、2階は使えるなど）の人は、当初避難所には来ていませんでした。でも、その人たちも不安な夜にたえられなくなったのか、お年寄りを中心に避難所に集まり始めました。

大勢の人が暮らす避難所生活は決して楽ではありませんでしたが、避難所は顔見知りの人が多いので、みんな「おはよう」「おやすみ」といったあいさつをかわしながら暮らしていました。それが不安を軽くすることにもつながったと思います。

また、食料配布も公平にできました。自分の家から持ってきた食料も、分け合っていたくらいでしたから、支援の物資も当然のように公平に分けられました。

他の避難所では食料をひとりじめする人がいた・・・という話を聞きましたが、わたしたちの避難所ではそういったことはありませんでした。本部につめた先生方が中心となって、いっかつで管理したのも良かったと思います。

避難所には介護が必要だけれども、家族がいっしょに避難できなかった人もいて、そうした方々は近所の人々が助けていました。おむつ介助も行う場合もありました。

取材地：宮城県石巻市
協力：キャンパス石巻のみなさん
取材：「小さな親切」運動本部